

発達障害者のトイレ利用と改善方策に関する研究

高橋儀平¹・橋口亜希子²・生方 咲³

Gihei Takahashi¹・Akiko Hashiguchi²・Saki Ubukata³

本報告は、日本発達障害ネットワーク(JDDnet)との共同で実施した、発達障害者の公共トイレの利用実態とそこから得られた課題の改善方策に関する考察である。発達障害者は概ね幼児期から児童期にかけてのトイレ利用に困難さが集中していることが判明した。しかし成人期の就学あるいは就労後にも困難を受けていることも少なくなく、本人及び保護者の外出機会制限となっている。改善すべき対応は、音過敏症、不特定多数の人々によるストレス、トイレ利用のこだわりなどに対してである。調査はJDDnetのホームページを活用して全団体の構成員を対象とした。

キーワード：発達障害、公共トイレ、同伴、アクセシビリティ、多様性

Keywords : Developmental disorders, Public toilets, Accompanying, Accessibility, Diversity

1. 研究の背景と目的

発達障害者支援法は2004年12月公布、翌年4月施行され、その後教育現場を始め各方面で発達障害者に対する理解が広がっている。特に対応が遅れていた物的環境整備面では2006年バリアフリー法の制定により、発達障害者が法の対象として認められ、環境面のアプローチも必要不可欠として認識されるようになった。さらには国連障害者の権利条約を踏まえた2016年差別解消法の施行、同年の発達障害者支援法の改正等によって、発達障害者への支援が社会的障壁の除去に資すること、すべての発達障害者が他の者と共生することを基本理念とする考え方の具体的方策が求められている。

本研究で対象とする環境要因である公共トイレは、発達障害者及び保護者等の同伴者が共に外出する際に、大きなバリアになっている。

そこで本研究では、発達障害者及び保護者が外出時に利用しにくさを認識している公共トイレの改善に資するため、発達障害者に対するアンケ

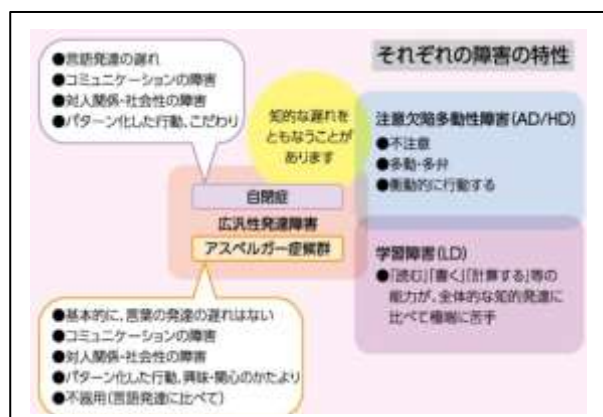


図1 代表的な発達障害者 (出典:厚生労働省)

ート及びヒアリング調査実施し、公共トイレの利用実態とバリアの解明を研究目的とした。

尚本研究の前提となる発達障害者の定義については、厚生労働省が度々使用している「発達障害の理解のために」のパンフレットから「代表的な発達障害」を引用している(図1)

2. 研究方法

本研究は2010年に設立された(一社)日本発達

1 東洋大学ライフデザイン学部・工博・〒351-8510 埼玉県朝霞市岡 48-1 048-468-6356

2 一般社団法人日本発達障害ネットワーク・〒108-0074 東京都港区高輪 2-20-30

3 LIXIL Building Technology Japan・東京都江東区大島 2-1-1 LIXIL WING ビル

表1 アンケート回答者の概要

アンケート回答者の概要				コミュニケーションが好き	26人 55.0
男性	79人 61.2	本人	54人 41.9	コミュニケーションが苦手	71人 46.5
女性	37人 28.7	父親	6人 4.7	ある物事に集中する	60人 41.8
無回答	13人 10.1	母親	59人 45.7	多動である	27人 20.9
6歳未満	6人 4.7	無回答	10 7.8	忘れ物をしやすい	54人 41.9
12歳未満	10人 7.8	常勤	30人 23.3	文字が読めない	11人 8.5
20歳未満	19人 14.7	パートアルバイト	16人 12.4	感覚過敏	55人 42.6
20歳以上	88人 68.2	家業専業	6人 4.7	感覚が鈍い	14人 10.9
無回答	4人 3.1	学生	28人 21.7	こだわりがある	72人 55.8
N=129 下段 %		その他	12人 9.3	その他	17人 13.2
		無回答	12人 9.3	無回答	11人 8.5

障害ネットワーク (JDDnet) との共同研究として実施された。アンケート調査は、JDDnet の加盟団体構成員を対象として、JDDnet ホームページを活用し調査票を公開、回収はEメール、郵送、加盟団体単位での取り纏め回答とした。調査は2017年6月~8月である。最終回答者数は129通となった。アンケート終了後了解を得られた者の中から首都圏在住者9名にインタビュー調査を実施した。本報告はアンケート部分を中心である。

3. 回答者の属性

表1は回答者総計129名の概要である。男女比は男6:女3:不明1、年齢構成比は、20歳以上7:20歳未満3である。トイレ利用の問題では児童期でのトラブルが多いと思われていたが、回答年齢構成の大半は7割が20歳以上であり、公共トイレの利用実態を知る上では年齢の偏りはむしろ有益と言える。実際の回答記入者比では概ね本人4:保護者5:不明1である。職業別では学生22%、就労36%、家業12%、その他40%とかなり分散している。

また心身の特徴としては、「こだわり」「コミュニケーション好き」がいずれも半数を超え、「コミュニケーションが苦手」「感覚過敏」「物事への集中」「忘れ物がしやすい」が4割程度であった。つまり、「こだわり」と「コミュニケーションが好き」(反対にコミュニケーションが苦手も同程度)で、感覚過敏で忘れ物がしやすいイメージである。

「多動である」との回答は20.9%で、20歳以上では16/27、60%である。

4. 調査結果の概要

4.1 自宅におけるトイレ利用実態

まず自宅でのトイレ利用実態を把握した。アンケート調査から自宅トイレ利用においても様々な困難が確認された。自宅でトイレで困りごとが

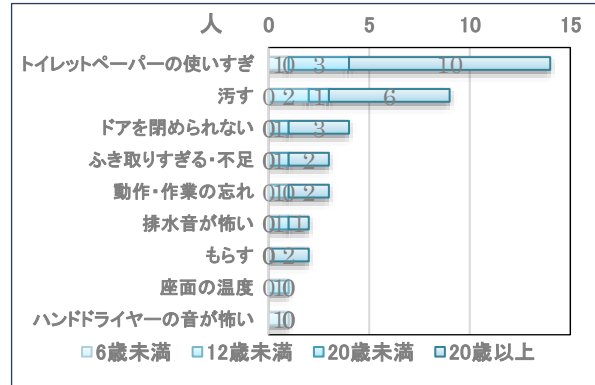


図2 自宅でのトイレ利用で困りごと

ある人は42人32.6%である。最も多い困りごとはトイレトペーパーの使い過ぎ、次に汚す、ドアを閉められないとい

表2 自宅での利用上の工夫

- ・座面を清潔にする、掃除をする
- ・水を止める
- ・明るい壁紙、ぬいぐるみを飾る
- ・鍵をかけない、ドアを閉めない
- ・常に見守りしている
- ・小便でも座る
- ・ペーパー1回分を示す
- ・手順や利用方法を掲示する
- ・鍵を付け替える

う回答が多い。座面の温度に感覚の鈍さがある人が温度を上げ過ぎてしまうことも指摘されている。回答数としては少なかったが、こうしたことから自宅では様々な工夫がなされている(表2)。また、自宅でも同伴が必要との割合は12歳未満で16人中9人56.3%、20歳以上も6人5%存在する。

4.2 外出時でのトイレ利用状況

外出時のトイレ利用が心配で外出を控えたことがあるか、と聞いたところ、10.9%はある、あまりない37.2%、を含めると凡そ半数弱が外出を控えた経験があるとみられる。全くない人は43.4%であった。

また外出時のトイレ利用は単独であるか、同伴者有りに関しては、7割が単独で、3割が同伴あ

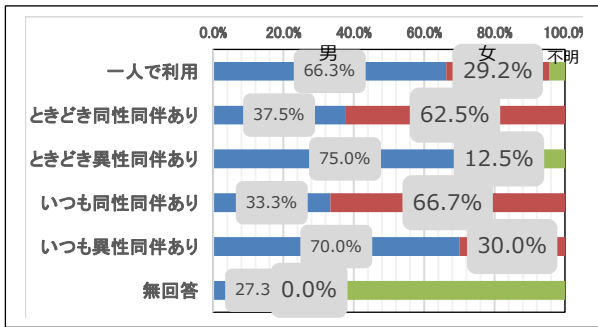


図3 男女別同伴者の割合

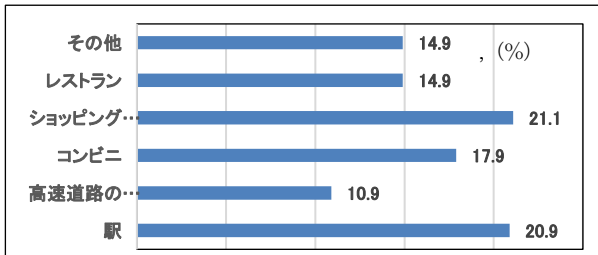


図4 外出時のトイレ利用施設

りと回答した。性別では男性の7割が異性同伴である。年齢的には20歳以上が8/29人16.2%であり、同伴者の中では圧倒的に異性同伴者が18/29人62.2%と多く、20歳以上の成人の場合でも半数以上53.3%が異性同伴者であることが判明した。自由記述やヒアリング調査では、「異性の息子と入るときの視線」、あるいは「注意された経験」など見た目ではわからない利用者へのストレスが増加しているとみられる。本調査では結果的に20歳以上の回答者が多かったのであるが、本人意向であるか否かさらに調査を進める必要がある。

また、外出頻度では回答者の多くが休日外出76.7%で、通勤・通学8.5%、外出なし6.2%であった。従って外出時にトイレ利用する施設用途が、ショッピングモール21.1%、駅20.9%、コンビニ17.9%に限定されていることは寧ろ妥当と言える。

4.3 外出時におけるトイレ利用のこだわり

外出時におけるトイレ利用で「こだわり」がある人は17人13.2%、あまりないという人39人30.2%を含めると、4割の人が何らかのこだわりを持ち、あるいは持った経験があり、全くない人は60人46.5%であった。前述した「外出控え」よりもこだわりがない人が多いようにも捉えられる。性別では、実数は少ないものの女性が男性の倍以上でこだわり感が強く21.6%、男性は7.6%、年齢

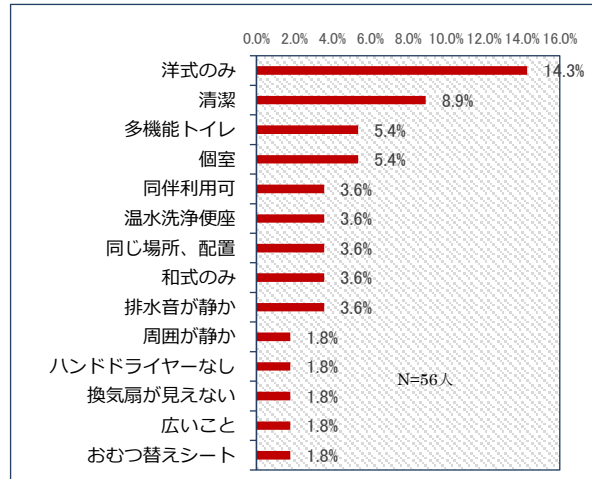


図5 トイレ利用時のこだわり(自由記述のまとめ)

表3 トイレ利用時のこだわり(アンケート自由記述)

- ・幼児の頃は隣やトイレ内の他人の音が気になって排便できず、外出先の障害者トイレや個室の洋式トイレを冷や汗をかきながら探し回った。今でも公園や駅の汚れたトイレには入れない。大きくなってから本人から聞いたが、赤ちゃんの頃は排水の音や様子が怖く吸い込まれそうに思い中々トイレで排泄できなかった(11歳m)
- ・障害者用トイレや洋式トイレで介助者も一緒に入れる広さのトイレのみ、多機能トイレ(20歳m)
- ・多機能トイレを積極的に選んでいる(21歳m)
- ・必ず個室に入る。初めての場所は多機能トイレに入りたがり、同伴にして欲しい(15歳不明)
- ・音姫がいつなるか分からず、怖くて入れない(19歳f)
- ・洋式トイレでないと入らない。並んでいても洋式が空くまでずっと待つ(23歳f)。
- ・一人ずつしか入れないトイレ(個室)を好む(8歳m)
- ・決まった場所にこだわり、そこが空くまで待っている。それで失敗したことも。いつもではないが、強いこだわりにならないように注意している(5歳m)
- ・感覚過敏なので極力和式トイレを使う、座ってするのが苦手である(45歳m)

別では、20歳未満より20歳以上にこだわり傾向が強く14.7%であった。しかし「あまりない」という人も含めた場合には12歳未満でのこだわり感が56.3%と高くなる。図5、表3は、自由記述による具体的なこだわり内容をグルーピングしたものであるが、数は少ないものの凡その傾向とみなせる。このうち特に音への過敏性は、排水管、音姫、他人の音、ハンドドライヤー等が指摘された。多機能トイレ利用は個室と同伴の両面がある。

4.4 多機能トイレを利用する理由

多機能トイレは良く利用する7.0%、空いていたから利用する41.1%、利用しない42.6%であった。約半数の人が利用している。その理由は図6の通りであるが、第一に空間が広いから41.2%、次に

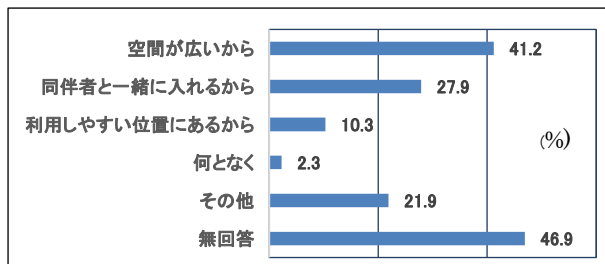


図6 多機能トイレを利用する理由

同伴者と一緒に入れるから 27.9%である。すなわち一定の広さがある個室トイレであること、配置が独立していること、同伴者との共同利用(男女共用)が可能である等の利用上のメリットが浮かび上がる。多機能トイレの機能分散が進められているが、現状では発達障害という特徴から利用ニーズが一定程度存在しており、今後の多機能トイレの機能分散では発達障害者への理解、利用認識が不可欠と言える。一方多機能トイレを利用した際に困ったことも一定程度(17.1%)あり、「ボタンや気になる表示が多い、不潔、広すぎる、大きい子なのに、ここは障害者用と注意を受けた、周囲の人の視線が気になる」などの回答がみられた。

5. 発達障害者にとって利用しやすいトイレとは

発達障害者が利用しやすいトイレを望む人は全回答者 79/129 人 6 割を超えた。その内 62.0%は

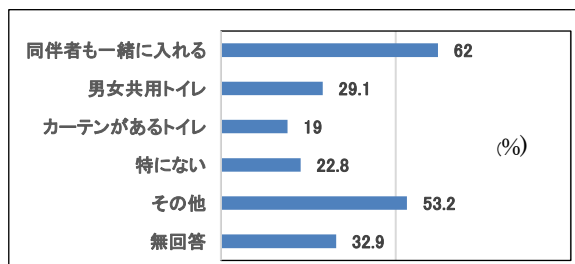


図7 発達障害者が望むトイレの形態

同伴者トイレを望み、男女共用トイレも3割である。いずれも同伴利用による要望である。その他として、個室化、荷物置き場、洗浄ボタン、利用手順表示、換気扇を含む音やにおいへの対応など様々な要望が寄せられた。

6. 課題と提案

結論として、発達障害者においても他の障害と同様、物的環境改善の必要性和可能性が高いということが確認された。男女共用の個室化、同伴トイレは我が国では経験が少なく今後の課題であるが、機能分散の推進と共に発達障害の利用実態を捉え丁寧な環境対応が求められる。以上の結論を基に表4に課題への対応・工夫を取り纏めた。公共トイレでは共通水準を示すことが不可欠であり、トイレや便房形態、設備の配置、利用者による便房選択の可能性を今後さらに検討したい。

表4 発達障害者トイレ調査から見てきた課題とその対応・工夫

(1)比較的共同な対応・工夫	関連性の高い心身の特徴							整備・改善の目標
	ある物事に集中する	多動である	忘れ物をしやすい	文字が読めない	感覚過敏	感覚が鈍い	こだわりがある	
配置等	●	●			○		●	同伴利用可能個室を複数確保
		●			●		○	個室内におけるプライバシーの確保
設備	●				●	○		感覚刺激の軽減
	●				●	●	●	感覚刺激の軽減
					●	●		感覚刺激の軽減
				●	●	●		自動排水によるバニック防止
	●				●		●	吸い込まれる感覚等の恐怖の軽減
(2)状況による対応・工夫								個別整備・改善の目標
換気扇は便所内の見えない位置に設置					●	●		吸い込まれる感覚等の恐怖の軽減
使用方法の説明は図と文字による	○	●		●			○	文字が読めない/図の理解に時間がかかる
荷物置き場をいずれかに設ける			●		●	●		荷物が多くなりやすい/忘れ物をしやすい
個室内からも時間が分かる工夫	●		○				●	ふき取りへのこだわり/トイレ内機能への集中/施設用途による対応
トイレトペーパー使用量が分かる工夫	●				○		●	適度な使用量が分からない
待つ場所として目印となる椅子やマーク設置		●		●			●	その場で待てず周辺をうろろしてしまう

【謝辞】 調査にご協力を頂いた日本発達障害ネットワーク(JDDnet)加盟団体、構成員の皆様に深く感謝申し上げます。

<注> 本調査は東洋大学ライフデザイン学部倫理委員会、JDDnet 倫理規定の承認を得て行われている。